

E
ラ
ン
ク
の
薬くす
師し

登場人物 紹介

リアム

グランの
パーティーメンバーで、
Bランクの武闘家。

ジャイル

グランの
パーティーメンバーで、
Bランクの魔法使い。

クリスト

グランの
パーティーメンバーで、
Aランクの剣士。

リズ

Bランクの精霊使い。
キヤルに代わって、
グランのパーティの
新たな回復役になる。

グラン

Aランクの勇者。
キヤルが元いたパーティの
リーダーで、彼女にとっては
憧れの存在。

カイド

ソロで活動する魔法剣士。
剣の腕は一流で、
高度な魔法も使いこなす。
命を救ってくれた
キヤルを気に入り、
彼女と旅をすることに。

キヤル

Eランクの薬師。ランクが低い
せいで落ちこぼれ扱いされ、
パーティを追い出された。
けれど、実は知られざる
チートな能力があって……

目次

プロローグ

7

第一章 落ちこぼれの帰郷ききょう

15

第二章 新たな出発！

153

エピローグ

287

プロローグ

キヤルは、冒険者パーティの一員だった。

仕事は旅をしながら魔物を退治することで、メンバーは勇者のグラン、剣士のクリスト、魔法使いのジャイル、武闘家のリアム、そして薬師くすりしのキヤル。

キヤルはメンバーの傷を治療したり、体力や魔力を回復させたりするのが役目だ。薬の材料になる薬草を探して、毎日あちこち駆けまわっていた。そして、どんなにしんどくても、仲間のために薬を作り続けた。

他のメンバーより体力のないキヤルは、ついていくだけで精一杯。だけど、彼らの役に立ちたくて、いつも必死で薬を作っていた。疲れて体が動かない時でも、自分よりも仲間の体力を回復させることを優先した。

でも、座り込んでしまいそうになる時もある。そんなキヤルを見ると、リーダーであるグランは顔を覗のぞき込んできて、いたわるように言うのだ。

「できないなら——別にいいんだよ？」

それはとても優しい声なのに、キヤルはなぜか恐ろしさで背筋が寒くなった。パーティの役に立

てなければ、捨てられてしまう気がして……

「できる！ だから捨てないで！」

彼に縋すがるような言葉がとっさに口から飛び出す。
嫌われたくない。グランのそばにいたい。

ただその一心で、キヤルは望まれれば望まれるだけ薬を作り続けていた。

——そんなある日。

ノーラという街についたキヤルたちは、宿でグランから一人の女性を紹介された。

「キヤル、新しく仲間になったリズだ」

グランの隣に立つ彼女は、光り輝く金髪に、緑の瞳とピンクの唇。そして華奢きゃしゃな手足の割に大きな胸を持つ、大層な美女だった。

精霊使いで、治癒魔法に長けており、少しだが攻撃魔法も使えるらしい。

「こんにちは」

リズはグランに寄り添うように立ち、にっこり笑って言う。その姿は自信に満ち溢あふれていて、キヤルに憧れさえ抱かせた。

「これからの予定だけ……」

グランが地図を広げる。彼は次の目的地を、隣国のスイル国に決めたと言った。

この国——アムスト国を出ることに、キヤルは震えた。いままで国中を旅してきたが、他の国へ



行くのは初めてだったからだ。

アムスト国の北に位置するスイル国は、四方を高い山脈に囲まれた小国だ。平地が多いアムスト国とは違って山と森が多く、どこから入国するにしても道は険しい。しかも、スイル国を囲む森は深いので、魔物が多く潜んでいるという。少しまわり道をして比較的安全なルートを通ったとしても、いままでよりずっと厳しい旅になるだろう。

キヤルがそんなことを考えていると、グランは地図の上部を指さして言った。

「この、ノース山を越える」

グランは自信に満ちた目で仲間を見まわす。けれどキヤルは即座に反対した。

「え？ この時季に、ノース山を越えるの？ それは無理だよ」

グランが示したのは、ここからスイル国へ向かう最短ルートだ。けれどこの時季に通るのは危険すぎる。

パーティメンバーの全員が、キヤルのことを冷めた目で見た。

その視線の意味が分からなくて、キヤルは首をかしげる。すると、クリストが大きなため息をつきながら言った。

「お前にはな」

要するに『足手まとい』だと言われたのだが、キヤルは一瞬なにを言われているのか分からなかった。

目をパチパチさせるキヤルに、クリストは言葉を続ける。

「このメンバーを見ろよ。山越えくらい簡単にできる。それに、いまはまだ秋だぜ？」

冬になって雪が深くなると、山越えするのは難しくなる。けれど秋なら、山を越えるのはそう大変なことではないと言いたいのだろう。

でも、あの山は秋こそ危ない。冬のほうがまだ安全なくらいだ。

というのも、ノース山には猿型の魔物が多くいるのだ。この山猿たちは肉食で、人間を襲って食べることも稀ではない。

通常、彼らは群れで山中を移動しながら暮らしているが、秋になると巣穴を作り、獲物を積極的に狩って溜め込み始める。そして冬には巣穴を中心に活動するようになるのだ。

柔らかな肉を持つ人間は、山猿の格好の獲物になる。この時季に山に入れば、彼らは必ず集団で襲ってくるだろう。その数は数十頭から、多ければ百頭くらいになることもあるという。

どんなにグランたちが強くても、多勢に無勢。この時季にノース山に入っていくのは自殺行為だ。もしも彼らがそのことを知らないなら、教えなければ。

「ノース山には、山猿がいて……」

キヤルが口を開くと、今度はリアムが睨むようにこちらに視線を向けてくる。彼から目をそらしながらも、キヤルはなんとか自分が反対する理由を説明しようとした。

「秋は山猿が……」

けれどキヤルが話し始めた途端、ジャイルのわざとらしいため息が聞こえて、言葉が続けられなくなる。

——ああ、そうか。

彼らはそもそも、キヤルの意見を聞く気がないのだ。

秋を避けて山越えすると決めたところで、冬になれば山は雪が深くなるので、体力面で劣るキヤルはついていけないだろう。

秋であろうと冬であろうと、ノース山を越えるならばキヤルは足手まとい。

その事に気付いてキヤルが黙り込んでいると、グランがいつもの優しい声で言った。

「もういいよ、キヤル。君だって、自分がこのメンバーの実力についてこれなくなっているのを分かっているんだろう？」

優しい声音が、逆に心に刺さって痛かった。

「あの山を越える。もう決めたんだ。隣国に行けば、僕らはもつと稼げるはずなんだから」

スイル国には魔物が多い。あちらでは魔物が信仰の対象になることもあると聞くから、積極的に退治する人がいないのだろう。

けれど被害は出ているので、冒険者への討伐依頼がないわけではない。それに、スイル国は資源が豊富で経済的に豊かな国だから、支払われる謝礼金も高額だ。

だから、アムスト国の冒険者には、わざわざスイル国へ行こうとする者が多かった。

「僕らなら、あの山くらい簡単に越えられるはずだよ」

——君さえいなければね。

そんな言葉が聞こえた気がした。

メンバー全員の視線が語っている。『もう、抜けてほしい』と。キヤルは絶るようにグランを見ながら、彼は目を伏せてしまい、こちらを見てはくれなかった。

彼の態度を見て、キヤルはもうどうしようもないのだと悟った。みんなのために、自分はこのパーティーから抜けなければならない。

そしてメンバー全員が、キヤルが自らそれを言い出すのを待っている。

リーダーであるグランが抜けてほしいと頼めば、キヤルを故郷の町まで送り届けるのは彼らの義務になってしまう。

旅の途中で放り出すようなことをすれば、周りの目が冷たくなる。パーティーとしての信用も損なわれるだろう。

だけど、キヤルの故郷であるコロンはアムスト国の端にある。ここから最短でも数ヶ月かかる距離だ。

だから彼らは、キヤルに自分から抜けてほしいと思っている。

そのことを察したキヤルは、震える唇をどうにか動かして、絞り出すように声を発した。

「分……かった。私は、ついていけないから……ここで、別れる」

「そうか。キヤル、世話になったな」

ホッとしたように微笑むグランが、とても遠くにいるように思えた。

いつも輝いて見えた彼の姿も、いまは涙で滲んで見えなかった。

「じゃあな」

「さよなら」

パーティの面々が次々と席を立った。そんな中、リズがキヤルに近付いてくる。

「ごめんなさいね。私が入ったせいで、あなたがいらなくなってしまうみたい」

キヤルに代わって新たな回復役となった彼女は、申し訳なさそうに笑って、わざとらしく謝った。

こうしてキヤルは、故郷から遠く離れた街で、一人ぼっちになってしまった。

旅に出てから二年、キヤルは十八歳になっていた。

第一章 落ちこぼれの帰郷（帰郷）

1

冒険者になる前のキヤルは、アムスト国の辺境にあるコロンという町に住む普通の女の子だった。元は王都に住んでいたのだが、母が病気になるのをきっかけに、家族で自然豊かなコロンに移り住んだのだ。

キヤルは、母が読み聞かせてくれる本が好きだった。

薬師として王宮に勤めていたこともある父と、森に入るのも好きだった。あまりに頻繁ひんぱんに森に入りしているのも、町の人たちがキヤルの緑の髪と瞳を見て、森の色が染み付いてしまったようだと笑っていたのを覚えている。

ある程度大きくなると、キヤルは父の調剤を手伝うようになり、町の人たちに薬の配達もした。

キヤルはこうして、大好きな家族と、優しい町の人と、豊かな自然に囲まれて育ったのである。

しかし、母はもともと体が弱かったこともあり、キヤルが十二歳の時に亡くなってしまった。父とキヤルは悲嘆に暮れながらも、母の眠るこの町で薬屋を続けることにした。

家族を亡くした父娘を、町の人たちはよく気にかけてくれた。そんな彼らに支えられ、キヤルが

涙を流すことなく母の姿を思い出せるようになった頃、今度は父が事故で亡くなった。

その時、キヤルはまだ十六歳。唯一の肉親まで失い、キヤルは一人ぼっちになってしまった。

途方に暮れるキヤルに、町の人たちは温かく接し、とても心配してくれた。だから、キヤルは父が遺した薬屋を続けていこうと思っていた。

そんな時、グランたちがコロンの町に現れた。

彼らは冒険者で、コロンの近くの森で魔物に遭遇したと言った。

魔物は通常、人里には近寄らない。緑の生い茂る森の奥を好み、そこから出てくることはほとんどないのだ。

魔物が町のそばまで出てくる——それは明らかに異常な事態で、危険なことだ。魔物の種類によつては、町は簡単に壊滅してしまう。

近くに魔物がいたと聞いて、町の人たちは騒然とした。慌てる人々を見て、グランは大きな声で言った。

「ご安心ください。魔物は僕たちが退治しました。この町に脅威はありません」

たくましい体に、よく通る低い声。金髪に青い瞳、凛々しい眉に切れ長の目。そして白くきれいな肌をしたグラン。

彼は勇者で、三人の仲間とともに旅をしていると語った。

そんなグランたちに、コロンの町長が魔物退治の謝礼金を渡そうとした。しかし彼らは、自分たちのランク上げを兼ねてのことだからと断った。

「魔物を退治したとギルドに報告すれば、ランクが上がるんです。だから、まるつきり無料の奉仕というわけではないんですよ」

ランクが高くなれば、報酬が高額な依頼を受けることができるようになる。自分たちはまだ駆け出しなので、早く稼げるようになりたくて旅をしているのだとグランは言う。

しかし町の人たちからすれば、近くに現れた魔物をいち早く退治してくれた恩人だ。

通常、魔物が町の近くに現れた時は、町長が冒険者の組合であるギルドに依頼し、そこから彼らのような冒険者が派遣される。けれど冒険者の到着を待つ間、町に大きな被害が出ることもあるし、場合によっては壊滅してしまうことさえある。

コロンの住人はグランたちに大変感謝し、彼らはあつという間に町を救った英雄になった。そうしてグランたちはしばらく町に滞在することとなり、コロンの町で唯一の薬屋であるキヤルの店にもやってきた。

グランたちのパーティには、回復役がいらないらしい。だから旅に回復薬は欠かせないのだと言つて、薬を買いに来てくれたのだ。

「この店は、君が一人でやっているの？ 若いのにえらいね」

キヤルが一人で薬屋を切り盛りしていると知って、グランは大げさなほど驚かせてみせた。

「この回復薬を少しだけ買って、試させてもらってもいい？」

グランはそう言つてキヤルの目を覗き込んでくる。青色だった彼の瞳が金色に輝いて、キヤルはポーツと見惚れてしまった。

こんなに素敵な男性は、キヤルの周りにはいない。キヤルは顔が熱くなるのを感じながら口を開いた。

「私たちの恩人ですもの。試すぐらいの量だったら無料で差し上げます」

本当は好きだけ持つていってもらえればいいのだが、キヤルにも生活がある。

申し訳なく思いつつ四人分の回復薬を差し出すと、グランは微笑んでそれを受け取った。

彼はすぐに薬をメンバーに分け与え、全員がその場で服用する。

「すっげえ。さすが、噂になっていただけある」

薬を飲んだ途端、グランのうしろに立つ剣士が嬉しそうに声を上げた。

「噂？」

キヤルが首をかしげても、彼らは笑うばかりで答えてはくれない。

「わざわざこんな辺境までやってきた甲斐があるぜ」

「魔物を倒したなんて嘘までついてな」

他の二人も、くつくつと感じの悪い笑い声を上げている。

——嘘？

魔物の話が嘘だということだろうか？ ……あれ？ そういえば、魔物の死体なんて誰も見えないのに、どうして町のみんなは彼らが倒してくれたと思っっているんだっけ……？

キヤルは不審に思っつてグランの顔を見上げた。

「おい。お前ら、しゃべりすぎだ。邪魔するな。……こいつらがはいじゃって、ごめんね。気

にしないで」

グランはメンバーを窘め、再びキヤルの目を見つめて詫びた。

彼の目を見ていると、頭が妙にぼんやりする。うしろの三人はまだ話をしているが、なぜか彼らの会話が頭に入っつてこない。

いま、なにか重要なことを聞いた気がしたので……

しつかりしようとして頭を左右に振っつてみるが、効果はない。

その時、グランにそつと手を握られた。

「キヤル………といったかな？ 薬はよく効いたよ。ありがとう」

グランが目の前で微笑む。彼の瞳を見ていると、クラリと眩暈がする。こんなに素敵な瞳は見ることがない。

そうしているうちに、キヤルは突然熱に浮かされたように、彼の役に立ちたいと思った。

——でも………私はお父さんの遺した店を守っつて決めたはずじゃ………？

そんな疑問が頭に浮かぶが、グランの金色の瞳を見つめていると、なにがなんでも彼と一緒にいたくなっつてしまふ。気付けばキヤルは、パーティの回復役として自分を連れていっつてくれないかとグランに提案していた。

「そのためには、ギルドに登録が必要だよ？」

彼は少し困った顔をして言っつた。

グランたちのパーティに加わるのなら、冒険者にならなければならぬ。そのためには、ギルド

に登録する必要があるという。

キヤルは、すぐにギルドに申請書を出した。

通常は王都にある冒険者登録所で能力検査を受けるらしいが、辺境のコロンにいるキヤルはすぐに行くことができない。そういう場合は、申請書だけで審査が行われるのだ。

ランクはEから始まってD、C、B、Aと上がっていき、最高ランクはS。能力検査を受けていないキヤルは、最低のEランクからスタートすることになった。

ランクと同時に、冒険者としての職業も登録されるのだが、それも申請書に書かれた経歴を見てギルドが判断する。

冒険者の職業には、勇者、剣士、魔法使い、武闘家、僧侶、精霊使いなど様々なものがあり、キヤルは最弱の職業『薬師』として登録された。

薬師は剣術や武術ができず、治療魔法も攻撃魔法も使えない人間がなる、ただ薬を作るだけの職業だ。やることは町の薬屋と変わらない。ただ、冒険者として旅をしているかどうかの違いだ。

けれどグランと一緒にいられるのなら、キヤルはそれでも構わなかった。

作りたての冒険者登録証を持って帰宅し、キヤルは早速旅の装備を整えた。体をすっぽり包み込めるくらい大きなマントにポケットをいくつも付けて、道具や薬を入れる。服のポケットやリュックにもたくさんの薬草を詰め込んだ。

そこまで準備を整え、「一緒に行きたい」と訴えるキヤルを見て、グランは仕方がないなど、ため息まじりに頷いた。

「じゃあ、一緒においで」

優しい声がキヤルをクラクラさせる。喜ぶキヤルに、グランはにこやかに言った。

「足手まとの君を連れていってあげるんだ。僕たちが望めば、望む分だけの薬を準備するんだよ？ それができなければ、君に用はないんだから」

キヤルは力強く頷いて、どんな薬でも作ると約束した。

彼らについていくのは、きつと大変だ。幼い頃から森に入るのは好きだったが、長い距離を男性の速度に合わせて歩くのは、それとはわけが違うだろう。

頭ではそう理解できているのに、それでもグランと一緒にいたかった。彼から離れたくなかった。——どうしてグランと一緒にいたいんだっけ……？

頭の片隅に疑問がちらついたが、グランの瞳を見るとすぐにあやふやになってしまう。

そうしてキヤルは、町の人たちの心配する声も聞かず、グランたちとともに旅に出たのだった。

旅は、思った以上に大変だった。

最初は体力のないキヤルに気を遣ってくれていたメンバーも、旅を続けるうちに徐々にいらだつようになっていった。

彼らは優秀すぎたのだ。

キヤルがパーティに参加した直後から、グランたちはたくさんの依頼を受けて魔物を次々倒し、どんどんランクを上げていった。

通常なら、Dランクより上に上がるためには何年もかかるはず。だというのに、二年も経たないうちにグランと剣士のクリストはDランクからAランクに、魔法使いのジャイルと武闘家のリアムもBランクになった。

AランクやBランクになれる冒険者は、ほんの一握りしかない。しかも長い時間がかかるのでほとんどは中年だ。そんな中、若くて見目のいい勇者グランが率^{ひき}いるパーティは、大層目を引いた。けれどキヤルだけは、最低のEランクのまま。それは、キヤルに戦闘能力がなく、魔物討伐に参加できないからだだった。

「キヤルは、戦いの時なにも貢献できていないから……」

パーティのメンバーがギルドに魔物討伐の報告をしに行くたびに、グランから申し訳なさそうにそう言われて、キヤルはいつもギルドの外で待っていた。

だけど、実際その通りなのでも言えない。戦ってもいないキヤルが、彼らの実績にあやかれるはずがないのだ。

キヤルの役割は、魔物との戦いで消耗したグランたちに、ただ薬を提供することだけ。

討伐対象の魔物を見つけると、キヤルはいつも真つ先に逃げる。そしてグランたちが戦う様子を後方からうかがい、彼らの体力や魔力がなくなりそうになったら、回復薬を投げ渡す。

グランたちには、キヤルの作った回復薬をあらかじめくつか渡してあった。けれど彼らは、旅をしながら疲れたと言ってはそれらを飲んでしまうので、いざ戦いが始まった時には手元がないことがしょっちゅうだった。

攻撃する能力も、身を守る能力もないキヤルは、必死で魔物の死角を探してグランたちに近付く。戦いの最中は彼らも気が立っており、回復薬を渡すのが少しでも遅くなると、怒鳴りつけられることが多かった。

そうして何度か回復薬を渡していると、やがて戦闘は終わる。その頃には、キヤルは体力も神経も使いはたしてボロボロになっているのだった。

けれどキヤルの仕事はそこで終わらない。魔物を退治したあとメンバーが休息を取っている間も、キヤルは働いていた。戦いで消費した薬を補充するため、ゆっくり休む四人とは別行動を取って薬草を集めたり、夜なべして調剤したりするのが当たり前だった。

苦しくて辛かったけれど、パーティの回復役として、役に立つところを見せなければならなかった。

そうしなければ、キヤルはただの足手まといになってしまう。

足も遅ければ力も弱いし、体力もない。だから戦闘には参加できない。

それでも、グランたちは一緒に行動してくれているのだから、少しでも彼らの役に立つため、薬は求められたら求められただけきちんと用意する。

特に彼らは回復薬を欲しがった。

本当は、回復薬はあまり多用しないほうがいい。自然治癒力を使わずに薬で回復し続ければ、体はそれに慣れてしまう。すると、もともと体に備わっていた回復力は、だんだん働かなくなっていくのだ。

けれどグランたちは、ことあるごとにキヤルの回復薬を服用していた。もはや乱用と言ってもいくらいに。

見かねたキヤルは、一度だけ注意したことがある。回復薬は本当に必要な時だけ服用するようにして、普段は休息を取って自然に回復するのを待ったほうがいいと。それが嫌なら、もっと効き目の弱い薬にしてはどうかとも提案した。

だがグランは、キヤルに冷たい視線を向けた。

そんな話は聞いたことがない。薬作りをサボりたいから言っているのではないかと、と。

キヤルは否定しようと思った。けれどグランの蔑むような視線が怖くて、それ以上にも言えなかつたのだ。

グランと一緒にいたかつたから、彼が自分のことを煩わしく思っているような態度をとつても、気付かないふりをした。

どれだけ頑張つても、キヤルが足手まといなのは変わらない。せめて捨てられないようにしなければと、キヤルは必死だった。

けれど、Aランクの勇者がいるパーティに、他の回復役が名乗りを上げないはずがない。

ある日ついにグランたちの実力に見合う回復役——リズが加わることになって、Eランクの役立たずはいよいよ必要なくなってしまったのだった。

2

グランたちのパーティから放り出されたキヤルは、引き続きノーラの街に滞在していた。

ここは王都から馬車で一日ほどのところにある大きな街で、商人の街とも呼ばれている。王都には貴族が多く住んでいるので、地価が高い。そのため、商人が中心地を避けて街を作ったのが始まりだという。いまではそうしてできた街がいくつも連なり、王都を取り囲むようにドーナツ形に発展していた。

広場では毎日市が開かれ、多くの人が行き交っている。

市では様々な物が売り買いされており、冒険者たちはギルドの仕事をする以外に、こういった場所では薬草や魔物の体の一部などを売ってお金を稼ぐこともあった。

これくらい大きな市ならいろいろな商人がいるので、どんな物でも売ることができるだろう。キヤルはそう思って、まずは薬を売ってお金を稼ごうとした。けれどキヤルの薬は、作り手のランクの低さを理由に非常に安く買い叩かれてしまうのだった。

作り手のランクが高ければ、経験豊富で技術力も高いという証明になるので、同じ薬でもいい値段がつく。反対に、ランクという保証がないEランクの薬師の薬は二束三文にされてしまう。

それに加えて、ある程度経験を積んだEランクの薬師というのは、駆け出しの薬師よりも信用が

なかった。自分で才能がないと言っているようなものだからだ。

どんな職業の冒険者でも、EランクからDランクになるのは簡単なので、普通に冒険者として活動していれば一年とかからずDランクになる。そもそも王都で能力検査を受けていけば、Dランクからスタートすることのほうが多いらしい。

ところがキヤルは、冒険者として二年間活動してきたにもかかわらず、いまだにEランクのまま。そんなキヤルの薬は、質の高い物しか扱わないギルドはもちろん、商人さえも買い取ってくれないならばと、ギルドが斡旋^{あつせん}している調剤の仕事を受けようとしたのだが、『信用問題にかかわると言われて受けさせてもらえなかった。

キヤルに残された手段は、薬の材料である薬草を売ることだけ。

とはいえ薬を買い叩かれるのと同じ理由で、薬草も非常に安い値段にされてしまう。

商人たちは、Eランクが採ってきた薬草だからと言って、通常ならばもっと高価なはずのもので安く買い取っていくのだ。

一生懸命探して採ってきた薬草を買い叩かれようとも、キヤルは生活のために売らないわけにはいかない。

グランたちと別れて一週間。わずかなお金を得るために、一日中走りまわっているような状態が続いている。

キヤルは自分がこの街に生活の拠点を置くことは難しいと感じていた。

自分の家を持てるほどの稼^{かせ}ぎもないし、周りは知らない人ばかりだ。もしキヤルの身になにかあっても、助けてくれる人はいない。そしてなにより、キヤルは故郷へ……自分の家へ帰ってきた。

けれどコロナまでは、キヤルの足では寄り道せずに歩いても数ヶ月以上かかる道のりだ。下手をしたら半年近くかかるかもしれない。街から離れた人^{ひと}気のない場所には、当然魔物も出るだろう。帰りつくまで、自分の身を守り続けられる自信はなかった。

だったら遠まわりしてでも、馬車が絶え間なく通るような大きな街道を行けばいいのだが、キヤルのような若い女が一人で歩いていたら、襲^{おそ}ってくれと言っているようなものだ。相手がただの強盗^{たう}だったとしても、キヤルには対抗する術^{すべ}がない。有り金をすべて失ってしまえば、もう野^の垂^たれ死ぬしなくなってしまう。

どこかのパーティに入つて、コロナの近くまで一緒に行つてもらえないだろうかとも考えた。だけど、冒険者を始めて二年も経つEランクの薬師^{くすりし}には、まったく需要がなかった。二年経つてもEランクのままということは、これからランクが上がる可能性も低いと思われるしまうのだ。いつまでも最低ランクのメンバーなんて、パーティにとつては邪魔にしかならない。

そしてキヤルも、この先自分のランクが上がることは多分ないだろうと思つている。

薬師^{くすりし}としての自分の力は、そんなに悪くないはずだ。王宮の薬師^{くすりし}だった父が指導してくれたおかげで、キヤルの薬はよく効くし、知識も豊富だ。

でも、キヤルはもともと小柄で、体力も腕力もない。どんなに効き目の強い薬を作れたとしても、戦いで役に立たないキヤルは冒険者としては落ちこぼれなのだ。

一人で旅をするのは無理。パーティに入るのも無理。だったら、護衛を雇うしかない。そのためには、人を雇うお金と、旅費が必要になる。旅費については、護衛の分もキヤルが出さなければならぬから、二人分。

いまのキヤルにとつては、気が遠くなりそうな大金だ。だけど、それが準備できないと帰ることはできない。

どうにかしてお金を貯めなければならなかった。

そうはいっても、キヤルが一日中薬草を採集してまわって稼げるお金は、せいぜいパンが一つか二つ買える程度だ。

宿泊費も払えないので、宿の主人に頼み込んで、廊下の掃除をする代わりに使用人部屋の隅っこを貸してもらっている。

薬草がたくさん採れた時にはいくらか貯金できたが、そんなことは稀だった。

そもそも、キヤルには薬草をたくさん採集することが難しい。

街から離れば離れるほど、薬草はたくさん生えている。だけど街から離れると、魔物が出現する確率も高くなるのだ。

キヤルが一人でいる時に魔物に遭遇すれば、確実に死ぬ。だから安全な街の近くでしか薬草を採集することができなかった。

それでも一ヶ月頑張ってみたが、貯金と呼ぶには恥ずかしいほどの金額しか貯えられなかった。

「本当に、役立たず」

キヤルは自分の毛布にくるまりながらつぶやいた。

こんな状況で、コロンに帰れる日など来るのだろうか。

——だけど、帰りたい。

郷愁にかられて心細くなったキヤルは、ふとグランたちのことを思い出した。

彼らはどうしているだろうか。

もうとつくにこの街を出発してしまっているだろう。ノース山を越えることはできたのだろうか。そんなことを考えて、キヤルは自嘲気味に笑った。

グランたちは強いのだ。足手まといのキヤルがいなければ、どんなに険しい山でもあつという間に越えてしまっただろう。

泣いて縋り付けばよかったとか、もつと頑張れたのではないかとか、いまさらながら後悔が押し寄せてくる。

グランが恋しい。その気持ちは、まだキヤルの心の中にある。

ただ、グランと一緒にいた時には調がかかったようにはつきりしなかった思考が、いまはすっかりして、なんとなく本来の自分を取り戻したような気分だった。

次の日、キヤルはため息をつきながらギルドに向かっていた。

ギルドでは冒険者に仕事の斡旋をしている。ギルドの依頼ボードには、仕事の内容が書かれた紙が貼られており、そこから自分が受けたい仕事を選ぶという仕組みだ。

そこに掲示されている仕事なら、薬草を商人に売るよりもお金を稼ぐことができる。

キヤルはEランクの薬師でも受けられる仕事がないかと、毎日ギルドで依頼ボードを確認してから薬草採集に行っていた。

そんなもののお目にかかったことはないが。

今日も仕事は見つけられず、がっかりしてギルドを出たキヤルは、ここ一ヶ月毎日歩いている道を、『探索』を展開しながら歩いていた。

『探索』は、少し魔力がある人間ならば誰にでも使えるような簡単なスキルだ。けれどキヤルはこの能力にだけは自信があった。

普通は自分の半径数メートルの範囲を探索するだけの能力のだが、キヤルは数百メートル先まで探索することができた。

とはいえ、いつも広範囲を『探索』しているときさすがに疲れてしまうので、危険に気付いてからでも逃げられるギリギリの範囲を警戒するようにしていた。

父のあとについて薬草採集に出かけていた頃から使い続けているので、呼吸をするように自然と『探索』を使いこなすことができる。キヤルの探索能力はすば抜けて高く、自分の上をいく人間には出会ったことがない。ただ、寝ている時まで警戒できないし、戦闘にはまったく役に立たないのだが……

魔物をいち早く見つけて、逃げる。

キヤルにできるのはそれだけだ。グランたちからも、逃げ足だけは速いと呆れまじりに言われていた。

そんなことを思い出していたら、キヤルの『探索』に引かかるものがあった。

その方向を見ると、がっしりした体つききの男性が道端の石段に座っていた。簡素な軍服のようなものに身を包んで、大剣を脇に置いている。黒目黒髪の……見ようによつては格好いいが、どちらかというど厳つくて怖い顔立ちだ。

彼は不機嫌そうに眉間にしわを寄せながら、地面を睨み付けている。そんな男性には、普段だったらどんなに遠まわりすることになっても、半径十メートル以内には近付かない。

だけど、だけど。

キヤルの『探索』が強烈に反応している。

なんと—— 蠱虫ではないか。

座り込んだ男性の腕の中に、蠱虫の反応があった。透けて見えるわけではないので大きさなどは分からないのだが、存在する場所を『探索』が教えてくれる。

蠱虫は人を宿主にして大きくなる寄生虫だ。

そして宿主の体力を奪い尽くすと、自分もともに果ててしまう。宿主が死ぬば自分も死ぬという残念な生態をしているため、見つけるのが難しく、詳しい生態も分かっていない。どこでどうやって寄生されるのかさえ分からない、未知の生物なのである。

だから研究者は、生きた蠱虫を欲しが。加えて、蠱虫は人の痛覚を麻痺させる毒を持っており、それは優れた麻酔薬の材料になる。

つまり、ものすごくいいお金になるのだ。

キヤルは思わず男性に駆け寄って声をかけていた。

「す、すみません！ その蠱虫こぢゅうください！」

訝いひかしげにキヤルを見上げる視線は、明らかに迷惑めいわくそうだった。キヤルは一瞬ひとしげひるんだが、蠱虫こぢゅうを諦あきらめるわけにはいかない。

それに、男性の顔色が思った以上に悪くて心配になった。彼は現在、体調がすこぶる悪いはずだ。体力を奪われ続けたためか、魔力も底を尽きかけているように感じた。早く蠱虫こぢゅうを取り出してあげなければ。

キヤルは男性の目の前にしゃがみ込んで、だらんと投げ出されている彼の右腕を指さした。

「この腕の中に寄生虫がいます。取り出すので、私にください！」

「寄生虫？」

彼は自分の右腕を見て、「はんつ」と鼻で笑った。そんなわけがないと言わんばかりの態度だ。

けれどキヤルは、男性が無視したり逆上したりしなかったことで、彼のこととがそれほど怖くなくなっていた。大金を生む蠱虫こぢゅうへの期待はますます膨ふくらんで、興奮を抑えきれなくなる。

普通はもつときちんと説明して、その上で治療するべきところだけれど、キヤルはもう我慢ができなかった。

ベルトに挟んでいたナイフを手に取り、リュックから出した大きな注射器シリンジを持って男性に迫る。

そんなキヤルの様子を見て、彼は諦あきらめたように言った。

「お好きにどうぞ」

「ありがとうございます！」

言うが早いか、キヤルは彼の右腕にナイフで傷を付けた。蠱虫こぢゅうが宿主の体内で分泌する毒のおかげで、こうしても痛みを感じないはずだ。

さっと切り開いた先に動くものを見つけ、そこに素早くシリンジの口をあてて吸い出した。

黒いものがにゅるつとシリンジの中に入ってくる。それは自分が生きていることを証明するように、うねうねとうごめいた。

蠱虫こぢゅうは黒くて長い蛇へびのような見た目なので、少々グロテスクだ。

男性は目を見開いて、自分の腕から出てくる虫を見ている。

シリンジに吸い込まれてくる蠱虫こぢゅうは、キヤルの指三本分くらいの太さがある。通常の蠱虫こぢゅうは、小指ほどのサイズのはずだ。

「大きい！ すごい！」

いままで見たことがないほど大きい。キヤルは思わず目を輝かせてしまった。これほどの大きさがあれば、旅費の半分くらいにはなるだろう。

これは、ものすごいお宝だ！

暴れる蠱虫こぢゅうをシリンジから瓶びんに移し替え、ふたをした。

この中には生理食塩水が入っているので、蠱虫こぢゅうはこのまま数日は生きられるはず。その間に売ってしまえばいい。というか、いますぐにでも売りにいきたい。

だが、目の前の患者を無視して走り去るわけにはいかない。しかもこのお宝を育ててくれたお方だ。

男性は驚いて一言も発せられないでいるようだった。キヤルはそんな彼に声をかける。

「毒を抜きます。だんだん痛くなつてきますが、動かないでください」

彼の腕には、真つ黒な穴がぼつかりと空いている。さつきまで蠱虫こぢゅうがいたところが空洞になつて
いるのだ。蠱虫こぢゅうの毒のせいで血さえ出てこない傷口を見て、キヤルは革袋を準備する。

そして、彼の腕に空いた穴にためらいなく指を突っ込んだ。

「なんっ……!?!」

男性が思わずといった感じで声を上げた。

「まだ痛くないでしょう? さつきの蠱虫こぢゅうが、自分が体内にいても宿主が痛みを感じないように、
痛覚を麻痺まひさせる毒を吐いていたんです」

その毒を、いまから収集する。キヤルは小さく『収集』の呪文を唱えた。

『探索サウチ』と『収集』。キヤルが使えるスキルはこれだけだ。

『探索サウチ』で探して、『収集』で集める。とはいえ基本は手で取ったほうが早いので、『収集』なんて
めつたに使わない。

例えば地面に深く根を張つた植物などは、『収集』で引つ張る力よりも根のほうが強いので、『収
集』では集められない。また、『収集』するものは一つに限定しなければならないので、これで掃
除でもしようものなら、髪の毛と砂と紙……と、それぞれ別々に集めなければならない。自分の近

くにあるものしか『収集』できないし、とにかく使い勝手の悪いスキルなのだ。

ただ、時折非常に便利に使えることもある。いまがそのいい例だ。

男性の傷口に突っ込んだキヤルの指から、黒い液体がゆつくりと集まつてきて、準備した革袋に
溜まつていく。

「よく……生きてましたね」

流れ出てくる毒の量を見て、キヤルは思わずつぶやいてしまった。……麻酔薬ますいやくの材料がこんなに
これも、なかなかの金額になるはずだ。

「……もうすぐ死ぬだろうなどは、思っていた」

呆然とした男性の声は、彼が本当に自分の死を予感していたのだらうと思わせた。蠱虫こぢゅうのサイズ
といい、体内の毒の量といい、彼は随分長い間苦しんでいたのではないだろうか。蠱虫こぢゅうに体力を奪
われ続けて、近頃は体を満足に動かすことさえできなかったはずだ。

「ぐっ……」

痛覚が戻り始めたのか、男性のうめき声が聞こえた。

腕の中に一本穴が空いているのだ。その痛みを麻痺まひさせていた薬を抜いているのだから、相当痛
いに違いない。

だけど蠱虫こぢゅうの毒を回収しないことには、この右腕は動くようにならない。

そのことを理解しているのか、彼は左手で右肩を強く握りしめて、痛みを耐えているようだった。

「もう少しです」

彼の辛そうな様子を見て、キヤルははげますように声をかけた。

急いで終わらせてあげたいとは思いますが、雑に治療して毒が残ってしまったては意味がない。毒が残っていたり……まさかとは思いますが、体内で蠱虫が繁殖していたりしないかを念入りに『探索』してから、ようやく指を引き抜いた。

蠱虫を取り出した時とは違い、ごぼっと血が溢れ出す。

毒を抜けそうなることは分かっていたため、血止めの薬を染み込ませた止血布をすぐにあてて傷口を圧迫する。

「強く押さえていてください」

痛そうにしている彼には酷だと思いが、手が足りない。彼にも手伝ってもらわなければ。

「あとは……止血、だけ……か？」

苦しそうな声がとぎれとぎれに聞こえる。キヤルは回復薬を取り出そうと、リュックに目を落としながら頷く。

「そうです。毒はすべて出したので、あとは止血するだけ——」

キヤルが言いかけた時、ふわりと、優しい風が吹いたような気がした。

顔を上げると、男性は止血布を外して右腕の状態を確認していた。

血が溢れていた傷口は、すっかり元通りにふさがっている。

「治療魔法が使えるんですか……？」

見た目で判断して悪いが、彼はどう見ても戦闘職だと思っていた。

「ああ、治療はあまり得意ではないが、これくらいなら治せる。さっきまでの体調不良は、どうにもできなかったんだがな」

男性は右腕を伸ばしたり振りまわしたりしながら、治ったことがまだ信じられないというような顔をしている。

キヤルだつて信じられない。

得意じゃないと言いながらも、表面の傷をふさいだけでなく、腕を動かせるまでになっているではないか。

しかも、彼はさっきまで死にかけていたはずだ。魔力も体力もまだほとんど回復していないのに、こんな高度な治療魔法を使えるなんて……

いろいろと突っ込みどころが満載だが、それらを無視してキヤルは口を開いた。

「蠱虫のような寄生虫は、治療魔法では殺せません。逆に元気になってしまいます」

گرانたちは、こういつた説明を聞くことがあまり好きではなかった。

クリストから『お前にえらそうに説明されると腹が立つ』と言われたことがある。病気や怪我の説明は必要ないから、とにかく治せといつも命じられた。

けれど目の前の男性は、興味深そうな視線をキヤルに向けている。

だからキヤルは説明を続けた。

「蠱虫は宿主の体力を奪って生きています。蠱虫が体内に住みついたまま治療魔法のお世話になると、宿主とともに蠱虫も元気になってしまふんです」

だから治癒魔法が効かない場合は、まずは蠱虫を疑うべきなのだが、症例がほとんどないせいで気付ける人間が少ない。そうして蠱虫の存在は誰にも知られることなく、宿主は命を落とす。

「なるほど。様々な治癒能力者を頼ったが、それが間違いだったか」

彼は顔をしかめて悔しそうにつぶやいた。

「治癒魔法をたくさんかけたんですか？ それであんなに立派だったんですね！」

素晴らしきかな治癒魔法！ 素晴らしきかな丈夫な宿主！

だが喜ぶキヤルを嫌そうに見つめて、男性は蠱虫を指さす。

「それはなんに使うんだ？ 殺したほうがよくないか？」

すぐにでも蠱虫を燃やしてしまいそうな目つきだ。キヤルは慌てて蠱虫をリュックに詰め込んだ。「ダメですよ！ これは研究に使われます。さらには、専用の装置を使って飼えば、生きている限り毒を吐き出し続けるので、自動麻醉薬製造機にもなります」

つまり、とつてもお金になるんです！

最後の言葉は言わずに、キヤルは蠱虫の入ったリュックを守るように抱きしめた。

男性は諦めてくれたのか、ふーっと息を吐く。

そんな彼を見て安心しながら、キヤルは回復薬と痛み止めを取り出した。

緑の丸薬が二つと、紫の丸薬が一つ。

「口を開けてください」

彼は紫の丸薬を見た時少し嫌そうにしたけれど、おとなしくキヤルの言う通りに口を開けた。

「囁んでから呑み込んでください」

キヤルは彼の口に丸薬を放り込みながら言う。

「……囁むと苦いのか？」

「そうですね。苦くなります。でも、そうしないと効きません」

暗に我慢しろと伝えると、彼の口が少しだけへの字になったあと、もごもごと動いた。

「……苦し」

体格のいい男性が薬を苦いと言ってうなだれる姿は、意外と面白い。

キヤルはふふっと笑いながら男性の背を軽く撫でた。

「さあ、もう痛みも大分和らいだでしょう？ いまのは痛み止めと、回復薬です」

そういえば、彼はキヤルに言われるがまま薬を呑んでしまった。そのことに気付いたキヤルは、一応注意を促すことにした。

「薬は、なんの薬か分かった上で呑んだほうがいいですよ」

だが、教えずに呑ませたのはキヤルだ。それを申し訳なく思っていることが男性に伝わったらしく、彼は苦笑いしながら頷く。

そうして笑っているとき、突然彼が驚いたように目を見開いた。

「……魔力が回復している」

そう言われて、キヤルは不思議そうに首をかしげる。

「だから言ったじゃないですか。回復薬だと」

なにを驚くことがあるのだろうか。

キヤルが作れるものの中でも特に強くて即効性のある薬を使ったから、回復するのは速いだろう。この薬は普段あまり使わないのだが、いまのような状況では必要とされる。

治療魔法をかけたとはいえ、体内の傷までは治りきっていないだろう。蠱虫がいたせいでできた腕の中の空洞を治すなら、体力を回復させて自然治癒力に頼るしかない。

けれどさすがに体力も魔力もほとんど底をついた状態では、自然治癒力も働きづらいので、こういう場合は薬に頼るべきだ。

「いや、普通ここまで……しかも、いまのは丸薬だっただろう？」

回復薬は、薬草の組み合わせはもちろん、調剤の仕方によってもそれぞれ効果に違いがある。キヤル一人だけでも数種類の薬を作れるし、薬師によって作り方も様々だ。

もしかしたら彼がいままで呑んだ回復薬には、彼の魔力を一度で全回復させるようなものはないのか。かつたのかもしれない。

実際、薬で回復したらしい彼の魔力は、ものすごく膨大だった。

ここは薬の売り込みどころだと、キヤルは立ち上がって胸を張る。

「そうです！ 私のオリジナルです！ 丸薬にすれば、瓶よりもずっと多く、長く持ち歩けるのです！」

回復薬には即効性が求められるため、液体であることがほとんどだ。キヤルも、自分で作ったもの以外は、液体の回復薬しか見たことがない。

だが液体は瓶に入れなければならず、戦闘中に割れることもあるし、かさばるので多くは持ち歩けなくなる。

けれどこの丸薬は、水に溶けやすい成分を多く含んでいるので、液体と同じくらい即効性がある。父が作った液体回復薬のレシピに改良を加え、丸薬にしたキヤルオリジナルのものだ。

初めてこれを使った時はグランたちにも非常に喜ばれたが、量産できないと伝えると『そんなものを作っている暇があるなら、もっと大量に作れる他の薬を作れ』と言われた。

——他の薬だって、容易く量産していたわけではないのに。

ふと浮かんできた苦い思い出を、キヤルは頭の隅に追いやった。

「どうです？ お一つ！」

キヤルは無理矢理笑顔を作って男性に薬を差し出す。すると、彼はすぐに頷いた。

「ならば、全部もらおう」

彼は買ってくれると言う。しかも、全部。

実はいま、キヤルは結構な量の薬を持っている。突然グランたちと別れることになり、彼らのために作ってあった薬がそっくり残っているからだ。

この最高によく効く薬でさえ商人たちは買ってくれなかったので、結局手付かずのままキヤルの手元にある。

これを彼に全部売ってしまい、蠱虫の分のお金と合わせたら……多少無理をすれば故郷に帰れるほどの金額になるだろう。

……だけど。

「全部は、ダメです」

薬師としてのプライドが、それを拒否した。

グランのもとではかなぐり捨てていたプライドだが、キヤルはこれから先も薬師としてやっていくのだ。一人になったからこそ、守らなければならないものがある。

驚いた顔をする男性に向かって、キヤルは頭を下げる。

「魔力も体力も、本来は時間が経てば回復するものです。薬を使うのは、戦闘時やいまのような怪我をしている時に限ったほうがいいと思います。薬を多用したせいで自然治癒力を損なってしまったのは、元も子もありませんから」

自分から薬を売り込んだ手前、嫌味の二つでも言われるかと思つてキヤルは身構える。けれどキヤルの耳に届いたのは、のんびりした声だった。

「ああ、なるほど。ちなみに、使用期限はあるのか？」

「は……はい。生の薬草も使っているので、半年以内を目安に使っていただくのがいいかと」

「そうか……」

男性は顎に手をあて、なにかを考えている様子だ。キヤルはその姿を呆然と眺めた。

出会つたばかりの小娘が作つた薬を欲しがり、しかも意見をちゃんと聞いてくれる。

そう思うと、なぜか胸がドキドキした。

急に心拍数が上がったことを不思議に思っていると、男性はキヤルを見て微笑んだ。彼が笑うと

垂れ目になって、優しそうな顔になる。

顔に熱が集まり始め、キヤルは困つてしまう。

男性はそんなキヤルの様子には気付かず、口を開いた。

「しかし、これだけの薬を一つも買わないのはもったいない。二つか三つ、譲つてくれるか？」

彼はキヤルの意見を聞き入れつつ、それでも薬を欲しいと言つてくれた。

キヤルは感激のあまり声を出せず、こくこくと首を縦に振る。震える手でリュックから薬を取り出すと、それを見て彼は頷いた。

「ああ、それだ。一ついくらになる？」

そう聞かれて、キヤルは思わず言葉に詰まった。

ランクのことは聞かれなかったから、あえてなにも言わなかったが……本当だったら、Eランクの薬師が作つた薬など、どんなにいいものでも二束三文にしかならない。

だけど、キヤルはこの薬には自信があった。採集に苦勞するような薬草も入っているし、そんなに安い値段では売れないのだ。

ランクについて、言うべきか言わざるべきか……

黙り込んでしまったキヤルを見て、彼は首をかしげる。

「どうした？ 俺はそこまで心配されるほど貧乏じゃないぞ」

値段を言わない理由を、勘違いしているらしい。

キヤルはそうではないと首を横に振り……最後にもう一度悩んだけれど、やはり正直に言うこと

にした。

彼がどこの誰かは知らなかった。でもこの街にいる以上、Eランクだということを言わずに薬を売っても、あとでどこからばれるか分からない。

蠱虫こちゅうがいくらで売れるかにもよるが、まだこの街でお金を稼かせぐつもりでいるキヤルは、薬師くすりしとしての信用を失うような危険を冒おぼすわけにはいかない。

「……私は、Eランクの薬師くすりしなんです。それを分かった上で、購入をご検討ください」

キヤルが自身のランクを告げると、彼は目を見開いた。

Eランクの薬師くすりしごときが、ランクも伝えずに薬を売りつけようとしていたことに驚いたのだろう。キヤルは頭を下げながら、金額を提示した。

「最初に言わなくてすみません。私はEランクですが、これには採集が難しい薬草も入っておりますので、一つ五万ルイでお譲ゆずりしたいと思っています」

五万ルイは、キヤルの一月ひとつきの生活費に等しい。数種類の薬草代に調剤の手数料……それらを考えると、この薬にはそれだけの価値があると思っっている。だが……

「五万？」

男性の訝いぶしげな声に、キヤルはさすがに高すぎたかと、思わず早口で続けた。

「じゃ、じゃあ、二万ルイではどうでしょうか？ え、えと。よければ、こっちの痛み止めも付けて……」

「待て待て」

慌あわててリュックを漁あさり始めたキヤルを、大きな手が止めた。

「五万で大丈夫だ。思ったよりも安く驚いたんだ」

「……安い？ そんなはずはない。薬一つで一ヶ月生活ができるのだ。」

「え？ 私、Eランクですよ？」

思わずもう一度確かめると、彼はそれがどうしたというふうと言った。

「そもそも、こんな薬を作れるやつが、Eランクなのがおかしい。これだけの効果があるものだったら、倍の十万はしてもいいはずだ」

「じゃあ、十万で！」

間髪かんはつを容ゆるみずに叫こゑんでしまった。高く買ってもらえるなら、それに越したことはない。

男性はすぐく呆あはれたような顔をしたあとで、「じゃあ二つもらおう。二十万でいいか？」と笑った。

彼のポケットから現金が出てきて、キヤルの手に載せられる。

代わりに薬を男性に渡すと、彼はそれを眺めて「すごいものを手に入れた」とつぶやく。

そんなの、こっちのセリフだ。

薬と引き換えに二十万ルイという大金を手にして、キヤルは震えた。

これは四ヶ月分の生活費になる。その間に一生懸命稼かせげば……！

「コロンに帰れる……！」

諦あきらめかけていた、帰郷ききやうがかなうかもしれない。

まずは蠱虫こちゅうを売ってしまおう。毒も一緒に。全部でいくらになるだろう？

そう思ったなら、いてもたってもいられなくなり、キヤルは勢いよく立ち上がって彼に頭を下げた。「ありがとうございます！」

男性がなにか言っていたような気がするが、キヤルは身を翻ひるがえしてギルドのほうへ駆け出す。故郷への道が開けた気がして、嬉しくて仕方がなかった。

ギルドに着くと、入ってすぐのところにある受付に駆け寄った。

蠱虫こちゅうを見せながら、「依頼品ではないが研究所に買い取ってもらえないか」と受付の職員に聞く。普段から様々なものを見ているギルド職員はこれが蠱虫こちゅうだと分かったようで、目を見開いてすぐに対応してくれた。

毒も蠱虫こちゅうとともに転送機で研究所へ送ってもらった結果、「当然買い取る」という返事がきた。

金額が提示されるのを、キヤルはぎゅっと拳こぶしを握りしめて待つ。しばらくしてギルド職員から、驚くべき数字が言い渡された。

——なんと、六十万ルイという大金で売ってしまったのだ。

キヤルの年収を、蠱虫こちゅう一匹だけで稼かせいでしまった。

蠱虫こちゅうが大きかったことと、毒が大量にあったことで、色を付けてもらえたらしい。これならば、すぐにでも帰る準備ができる。

護衛を雇むかえば野宿必至の貧乏旅になりそうだが、少しでも早く帰りたい。

そんな貧乏旅に付き合ってくれる護衛がいるのかどうかは微妙なところだが——キヤルは、すぐ

にギルドに護衛の要請をすることにした。

ギルドの奥に、書類を作成するためのカウンターが並んでいる。そこで依頼書を作成して、ギルドに登録してもらおうのだ。登録が済んだら、その依頼書をギルド内にある依頼ボードに貼る。これで依頼は完了だ。あとは仕事を受けてくれる人間を待つだけとなる。

職務…護衛

内容…コロンまで女性一人を連れていくこと

報酬…三十万ルイ

そう依頼書にしたためて登録を済ませ、キヤルは依頼ボードの前に立つ。

依頼書は、基本的にはその依頼を受けるのに求められるランクごとに並んでおり、一番端に設定ランクなしの依頼を貼るスペースがある。キヤルはその中でもできるだけ目立つところに貼ろうと、必死で手を伸ばして高い位置に依頼書を貼り付けた。

その途端、キヤルの頭の上から腕が伸びてきて、それを簡単にひよいと剥はがしてしまう。

「なっ！ なにするの！」

依頼書の行方を目で追ってみると、ついさっきまで蠱虫こちゅうを身に宿していた男性が背後に立っていた。彼は腰に片手を当ててキヤルの依頼書を読んでいる。大きな男性だとは思っていたが、立ち姿を

改めて見ると、本当に大きい。それでいて無駄な贅肉ぜいにくがない、しなやかな体つきをしていることが分かった。

キヤルの身長は彼の胸元くらいまでしかない。そんなキヤルを見下ろして、彼は眉根を寄せた。「護衛？ ……あんたをか？」

真上から覗のぞき込まれているような気分を味わいながら、キヤルは返事をする。

「そうです。故郷に帰りたいんです。だからそれを返してください」

というか、元の場所に貼ってください。

キヤルが男性の高い身長を羨うらやましく思いつつ言うと、彼は眉間のしわを深くした。

「……俺が依頼を受ける。故郷まで連れて行ってやる」

キヤルは目を見開いて彼を見つめた。

「なんだ？」

あつげに取られてなにも言えないでいるキヤルに、男性は首をかしげて問いかけてくる。

「あの……でも、コロナまでですよ？ あなたくらいのランクの人が受けるには、報酬が少なすぎるんじゃない？」

コロナまでは数ヶ月、いや、もしかしたら半年近くかかる長旅になるだろう。その間の生活費はこちらが支払うとはいえ、三十万ではおいしい依頼だとは言えない。

ランクが高ければ、もっと報酬のいい仕事を受けられる。だから普通はこんな報酬の少ない仕事に、まともな冒険者は手を出さないのだ。

それを理解しつつも、キヤルはダメもとで依頼を出した。これで受けてくれる人が現れなければ、引き続き貯金しつつ報酬を上げていけばいいと思っていた。

キヤルが依頼にランク制限をつけていないのはそのためだ。よくてCかD、悪くてEランクだったとしても攻撃のできる人が受けてくれればいい、くらいのつもりでいる。

目の前の男性は多分Aランクだろう。グランよりも強いと思う。

そんな彼に仕事を頼んだら、いったいどれくらい追加報酬を要求されることか……しどろもどろになるキヤルを見て、彼は苦笑した。

「もしかして、俺のランクが分かるのか？」

キヤルは『探索』サーチを使って、相手の体力や魔力量を測るのが得意だった。そこからその人の強さがなんとなく分かる。いつも無意識に測っているのだが、それが失礼だったかと思いい、キヤルは肩をすくめる。

「いえ……でも、体力や魔力量は分かるので……なんとなく」

「なるほど。見る目はあるようだ。だが、恩人が命の危険にさらされるのは、見過ごせない」
命の危険？

どこにそんなものがあるというのだろうか。

キヤルはきよんとする。彼はそんなキヤルの手を引っ張って歩き出しながら言った。

「護衛を引き受ける人間が全員、善人だと思わないことだ」

そう言いつつさっさと受付まで行き、キヤルの依頼を受けると申し出てしまう。

「カイド！ お前がこれをやるのか？」

受付のおじさんがびつくりしたように叫んだ。

この大きな男性はカイドという名前のようだ。

「ああ。ちよつと命を助けられたんでね」

「いえっ……！ 助けただなんて、大げさです！」

キヤルは慌てて首を横に振る。おじさんはカイドの体を上から下まで見て、それからキヤルへと視線を向けた。それからなにかを考えたあと、ふと思いついたように言う。

「ああ、さっきの蠱虫、まさかカイドの体にいたのか？」

受付のおじさんは、キヤルが蠱虫を売りに来た娘だと気が付いたようだった。

「研究所の奴らといったら、そりゃあもう、えらい喜びようだったよ。またよろしくだつてさ」

最後の一言だけはカイドに向けて、おじさんはにやりと笑いながら言った。

カイドはおじさんの笑顔を見て、嫌そうに顔をしかめる。

「あんなのに寄生されるなんて、もう二度とごめんだよ。……まあ、そんなわけでこいつは俺の命の恩人だ。だからこの依頼は俺が引き受けた」

カイドがため息まじりに言うと、なるほどと言うようにおじさんは頷いた。

「了解。嬢ちゃん、ラッキーだぜ。カイドが護衛につけば、安全が保障されたようなもんだ」

そう言って豪快に笑うおじさんを、カイドは眉間にしわを寄せて見つめる。

「買いかぶりすぎだ。とまあ、そういうわけだから、ちよつとコロンまで行ってくるよ」

彼はそれだけ言うと、キヤルの手を引いてギルドの外に出てしまった。

キヤルは急な展開についていけず呆然としていたが、そこでようやく頭が働き出す。

「あ、あのっ……！ 助けただなんて、大袈裟です！」

どこから突っ込んでいいか分からず、思ったことをそのまま口にした。

キヤルは蠱虫を欲しただけで、彼を助けたつもりなどなかった。それなのに命の恩人扱いされるのは、非常に居心地が悪い。

けれどカイドはキヤルの言葉を否定する。

「そんなことない。君が蠱虫を取り除いてくれたから、俺は死なずに済んだ。感謝するのは当然だろう？」

蠱虫を取り除いたのは確かだが、それで彼に感謝されるのは違う。キヤルは相応の利益を、蠱虫をもらったことで手に入れているのだ。彼がキヤルに恩義を感じる必要はない。

そう思つて口を開こうとすると、カイドが立ち止まってこちらを向き、キヤルの体をくると反転させる。

キヤルは彼に背中を預けて、ギルドのほうを見るような体勢になった。

「よく見る。冒険者は基本的に男で、気の荒い者が多い」

ギルドの周りには、筋骨隆々で明らかに強そうな男たちがたむろしている。

彼らはみんな、喧嘩っ早い。酔うと手が付けられない荒くれ者もいた。

そんなこと、よく見なくなつて知っている。キヤルだつて二年間冒険者をしていたのだから。

キヤルはいつも、そういう怖そうな人たちにはできるだけ近付かないようにしていた。

「報酬はどう渡す？ 半分は前払いで、残りはコロンに着いたあとか？ そんなもの、寝ている間に依頼主の身ぐるみを剥いでしまえば、簡単に手に入る。わざわざコロンに行くまでもない。金を奪ってお前を山に投げ捨てて、しばらくこの街の付近で姿を見せなければ、依頼がどうなったかなんて誰にも分からない」

カイドの言葉を聞きながら、キヤルは血の気が引いていく思いがした。

「だから普通、護衛の報酬は目的地にいる人間が支払うことにするんだ。お前にそういう相手がいるか？ 依頼達成のサインがあるから、到達するまでは安全だと思っていたんじゃないか？」

こういう依頼の場合、依頼主は目的地まで送り届けてもらったあと、報酬を渡すほかに、依頼達成を証明するサインをする。そして冒険者がその書類をギルドに提出すると、成功実績として登録されるのだ。

けれどギルドは、依頼がどうやって達成されたかどうかをいちいちチェックしたりしない。

「依頼達成のサインがもらえなくても、別に大した痛手ではないんだ。途中で気が変わったのだと言って戻ってきてもいい」

その場合は、依頼失敗の汚点がついてしまうが、膨大な量の仕事をこなす冒険者たちにとって、失敗は珍しいことではない。だから疑われることもないだろう。

さらに、キヤルの口さえ封じてしまえば、サインを偽造して依頼を達成したとギルドに報告してもいい。寝ている間どころか、起きている間でも人目がなければキヤルなど簡単に殺せるだろう。

もちろん、ギルドが不審に思っただけならば事実が露見する。しかし、その頃にはキヤルはもうこの世にいない可能性が高い。

「……言いたくはないが、ランクの低い冒険者には、そういう人間が多い」

彼は「俺の偏見だがな」と付け加えてため息をついた。

つまり、キヤルが狙っていたCやDの冒険者では危険だということだ。

Bランク以上であれば貴族からの依頼を受けることもあるので、信用が大切になってくる。だから不法な手段を使う人間もあまりいないらしい。

しかしキヤルの依頼は、Bランク以上の人間が三十万ルイで受けてくれるような仕事ではない。

「お前にとっては俺も素性の知れない人間だろうが、俺はお前に恩を感じてこの仕事を受けた。そのへんの低ランクの人間に頼むよりは信用できると思うぞ？」

そんなこと、言われるまでもない。ギルドのおじさんの対応からも、彼が信用できる人間であることは明らかだ。

この幸運を逃せば、キヤルが故郷の土を踏むことは二度とないかもしれない。

キヤルはじつと考えて、うしろをそっと振り返った。

「お願いしてもいいんですか？」

「もう引き受けている」

そう言いながら、カイドはキヤルの頭をぐりぐりと撫でまわした。

「そうと決まれば、まず名前を聞いてもいいか？ 俺はカイド・リーティアスだ。職業は、魔法剣

士つってとこかな」

魔法剣士は、魔法で剣を強化して戦う戦闘職だ。ただ、普通の魔法剣士は、剣を強化する魔法しか使えないはず。けれどキヤルは、彼が治癒魔法を使うところを見ている。

魔法量も相当多いようだし、彼ならば仲間を選び放題だろう。それなのにパーティを組んでいないのだろうか。

キヤルが疑問に思つて尋ねてみると、彼は組んでいないと答えた。

「人と組むのは煩わしいからな。大きな商隊の護衛団に加わることはあるが、魔物退治なんかは一人で依頼を受けている」

キヤルは目を見開いた。

一人で魔物退治に行くということは、腕によほどの自信があるということだ。

彼は思った以上に強そうだと思つた途端、キヤルは少々緊張してしまった。

冒険者の社会は弱肉強食で、強い人がえらい。だから最下層にいるキヤルより、カイドのほうがずっとえらいのだ。

キヤルは小さくなりながら自己紹介した。

「カ、カイド様。わ……私は、キヤル・アメンダです。職業は……薬師です」

「お前は雇い主だろ。敬語を使うな。カイドと呼べ」

そう言うカイドの態度からは、キヤルを雇い主として敬う気など感じられない。

キヤルのほうも、彼を相手に雇い主らしく振る舞える気がしなかった。

キヤルがあたふたしていると、カイドは気に入らなそうに眉間にしわを寄せて言う。

「……それとも、俺にも敬語を使えと仰いますか？」

「言わない！ 敬語使わない！」

思わず片言になつてしまった。

こんな強くて立派な人に敬語を使われるだなんて耐えられない。

「じゃあ、よろしくな」

そう言つて微笑んだカイドを見て、キヤルの頬にまた熱が集まった。

3

カイドに護衛を依頼した次の日。

キヤルは荷造りをして、街の門の前でカイドを待つていた。

王都やノーラのような大きな街には、治安維持のためにこうした門が設置されている。基本的に夜の間は閉門しているので、特別な事情がない限り、街を出るためには朝の開門時間を待たなければならぬ。

カイドとは、その開門時間の少し前に待ち合わせをしている。

しばらくして、リュックを一つだけ背負つたカイドが現れた。その姿を見て、キヤルは驚く。